ニュージーランド　高齢者福祉&ダイバージョナルセラピー研修

・期　間：平成 28 年 4 月 12 日(火)～4 月 18 日(月)
・訪問地：オークランド
・参加者：１１名
　　所属：病院 4 名、福祉施設･デイサービス 4 名、その他 3 名
　　（職種：医師 2 名、看護師 4 名、介護福祉士 3 名、事務 1 名、理事長 1 名）
・後　援：日本ダイバージョナルセラピー協会

はじめに

2017 年 1 月 1 日時点での日本の全人口は 1 億 2,686 万人となった。年代別人口は 0～14 歳が 1,575 万人、15～64 歳が 7,640 万人、65 歳以上が 3,471 万人。高齢化率（全人口に占める 65 歳以上人口の割合）は 27.4%となり、1 年前の 2016 年 1 月 1 日時点の 26.8%よりも 0.6 ポイント上昇している。高齢化に伴い、健康寿命を維持し、最期まで地域で暮らし続ける、地域包括ケアを進めているが、「自分らしく楽しく生きることを支援するケア」の取り組みには、まだ課題が多い。

近年、日本でもテレビでその高齢者福祉が取り上げられるなど、関心が高まってきたニュージーランド（以下ＮＺ）へ、当財団の研修会講師である芹澤隆子氏による高齢者福祉&ダイバージョナルセラピー(以下ＤＴ)研修に参加しました。

ニュージーランドの紹介

ニュージーランド（以下ＮＺ）は、「オーストラリアの南東 2000 キロに位置する南太洋の島国で、国土は日本の約 4 分の 3、人口は 27 分の 1 の約 470 万人(高齢化率 15.1%)です。訪れてみて、穏やかで緑の多い国という印象を受けました。
平均寿命は 82 歳（男性 80 歳、女性 83 歳）。「自分は健康である」と自己報告した人の割合は OECD 中で第 1 位でした。

ＮＺの医療は、2012 年では、GDP の 8.7%、人口あたり$3,929 米ドルを医療に投じていました。支出のおよそ 77%は公的負担です。ユニバーサルヘルスケアが達成されており、ＮＺが所管しており、現場へのサービス提供は 20 地域ある保健省配下の政府機関 District health boards (DHB)の責務になります。ＮＺには社会保険制度は存在せず、一般税収にて運営されます。老齢年金（ＮＺＳ）は、税で賄われるため、保険料の負担はなく、資産調査もなく、現役時代の所得や納税額に関わらず全ての高齢者に一定額が支給されます。

ＮＺのダイバージョナルセラピー(以下ＤＴ)歴史は、30 年前にオーストラリアから伝わり、両国とも、ＤＴは国家資格であり、施設等には、一人以上が勤務していることが条件となっているとのこと。ＤＴセラピストは、1,000 人以上います。

2015 年からＮＺと日本のＤＴ協会の交流が始まり、2015 年 9 月のセミナーに来日されたオルキディア氏の強力なサポートによって、今回のツアーが実現したそうです。

１．研修施設の紹介

研修の拠点は、ダイバージョナルセラピストのオルキディア氏の勤務するセルウィンビレッジ

（Selwyn Village）という高齢者施設です。経営する Selwyn Foundation は、ＮＺ最大の福祉財団で、「ケアの連続性」を理念として掲げており、自立した高齢者のための住居型から通所施設、認知症を伴う人や介護を必要とする人たちのユニット“Rest Home”と、緩和ケアを含む病院レベルのケアを提供する“Hospital Care”（日中は医師も常駐）まで、その人の状況に応じたタイプの建物が広い敷地に点在します。中心には美しいガーデンに囲まれた教会があり、入居者約 600 人の大規模な総合施設です。
初日は、マオリ族による歓迎の儀式とセルウィン財団の理事長のご挨拶がありました。

ホールで歓迎式の集合写真

セルウィンビレッジの庭園

ランチタイム

ティータイム

カラフルなドレスで

２．NZ の高齢者福祉と DT 研修

ＮＺの高齢者政策や地域福祉、介護施設の建築デザインなどの専門家からレクチャーがあったり、ボディーパーカッションセラピーや Baby Buddies(乳幼児を連れた母親たちのボランティア)などのＤＴプログラムに参加ができたり、Cognitive Stimulation Therapy (CST／認知刺激療法)のワークショップなどを受講しました。また、オークランド大学の Brain Research Center (脳研究所)では、脳科学に基づくスポーツと認知症の研究や、脳の部位別冷凍保存の実際なども見学しました。

１）ＤＴプログラム見学(ボディパーカッション・コーラスコンサート、赤ちゃんとの交流など多彩なアクティビティ)

DT プログラムは、１日の同じ時間に複数のプログラムが計画され、利用者はその中から選択して参加ができる。ＤＴは、利用者が興味を持てるように支援し、どのように参加しているか一人ひとりの変化も把握している。参加しないからといってすぐ参加を促す言葉かけはしない。他の人に気がつきにくい参加行動や関心のあること気がかりなことを察知した働きかけを行っているのが伺えた。

ＤＴのスケジュール表

入居者による歓迎コーラス

赤ちゃんとの交流プログラムの見学やボディパーカッションのプログラムに参加しました。ボディパーカッションは、ボディを一定に打つことと音楽と発声を組み合わせることにより心地よい刺激を感じて脳の活性を促し、自ら楽しむ気力を喚起する。赤ちゃんとの交流プログラムは、参加される方の表情や行動が変わるとのこと。

ボディパーカッション

赤ちゃんとの交流プログラム

ダンスセラピーのダンスムーブメントは、ローミィー ガーディナー メソッドといい、多くの感覚（右脳左脳・ボディ・音楽・リズム・動き・言葉など）を組み合わせエクササイズです。

２）充実した講師陣と研修内容

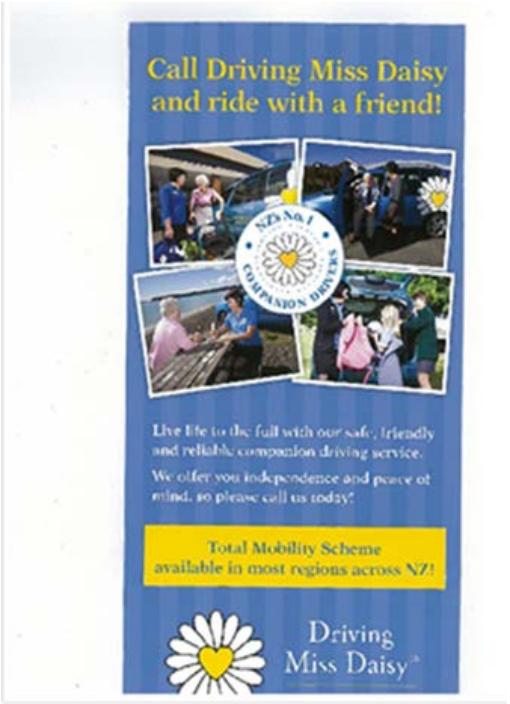
高齢者福祉への取り組みを、多く分野の講師から専門的な講義がありました。

① 認知刺激療法（ＣＳＴ（Cognitive Stimulation Therapy 認知刺激療法）の基本の講義(オークランド大学医学＆健康科学部)

② オークランド大学脳研究センターの脳研究と高齢者ケアの講義、脳研究所見学（オークランド大学医学＆健康科学部　解剖学教授、脳研究所所長）
③ 保健省　ヘルスケアサービス部門（シニアライン）：65 歳以上の電話情報サービス
在宅で過ごせるように高齢者や認知症に関する情報センター。【相談】24 時間・365 日。
情報提供パンフレット多種。送迎運転サービス(写真)、日本語版パンフレットもあり
④ 介護施設の建築デザインなどの専門家からレクチャー
⑤ ニュージーランドにおける認知症ケアの新政策と専門的活動（NZ アルツハイマー協会オペレーションマネージャー）
⑥ ダイバージョナルセラピー協会会長によるニュージーランドにおけるダイバージョナルセラピーの地位と医療･高齢者ケア：目的を持ったアクティビティを提供するのが使命。
コミットメントしたことは実現する一人ひとりの覚悟。
⑦ ニュージーランドの高齢者政策や地域福祉対策：下院議員との意見交換
ニュージーランドにおける最近の高齢者ケア戦略 aged concern 執行役員より講義。
：肯定的な高齢化を促進するために 3 つの優先することは、1 高齢者の雇用を促進する
2 高齢者の人々の見方を変える　　3 高齢者の人権保護、虐待、ネグレクト
⑧ ダイバージョナルセラピーの導入と実践　（DT 統括マネージャー）など

生活空間の色彩やデザインについて

下院議員との意見交換



「シニアライン」の
車送迎パンフレット

3）ＤＴの導入と実践（アセスメントからエバリュエーションまで）

各個人が、いかなる状態にあっても自分らしくよりよく生きたいという願望を実現する機会を持てるように、その人の独自性と個性を尊重し、援助するためには、アセスメントからエバリュエーションまで「事前調査→計画→実施→事後評価」のプロセスに基づいて、各個人の“楽しみ”

と“ライフスタイル”に焦点をあてる全人的アプローチの実際を、DT 統括マネージャーであるオルキディア氏より講義を受けました。

・プログラムの具体的な進め方について
・評価は、職種の連携など 3 週間で 10 項目を査定。本人、家族、医療、牧師、DT 等で評価
・評価には数値を用いているが、数値を優先していない。評価項目の例（興味、コミュニケーションの度合、楽しんでいるか、気分･調子など)。
・レクリエーションは、時間をつぶすためや忙しくさせたりするものではない。
80 人いたら 80 のアクティビティを計画する。

オルキディア DT 統括マネージャー

入居者様との交流場面

４）移動・移乗の手段について

敷地内では、建物の入り口に電動車いすが置かれ、乗っている人に頻繁に出会いました。また、リフトコーナーでは、多くのリフトがあり使用されている状況がわかりました。

ＮＺでは、一人では抱えてはいけない法律があり、自分の身を守るためのリフト使用であるとのこと。

敷地内は、電動車いすで

施設のリフトコーナー

研修を終えて

1997 年オーストラリアに「高齢者介護省」が創設され、初代大臣は、「老いるとは楽しむこと。耐えることではない。」と宣言しました。今回の NZ 研修では、ＤＴを専門職とするＮＺの高齢者ケアの実際を学ぶことができました。

日本の高齢者福祉の「最期まで自分らしく楽しく生きること」ことを支援する取り組みはＤＴの活動や情報提供の仕方内容などを含め NZ に学ぶ必要があると思いました。

今回の研修で学んだことを、組織人として個人として具体的に実践していくことを自覚できた研修でした。